

◇実践活動記録

「蜷川のすてき探偵団」

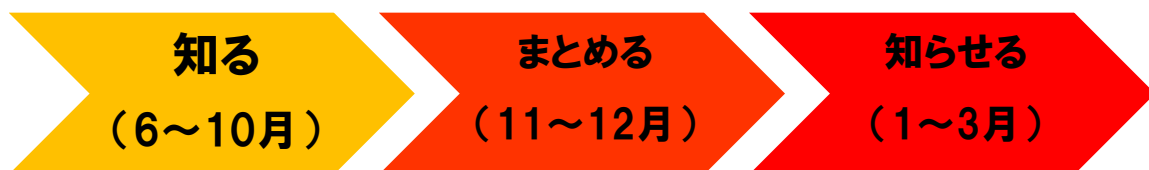
～蜷川校区に眠る「すてき」を掘り起こせ！～

1. はじめに

蜷川小の3年生は、地域にある畑で大豆を育て収穫するという総合的な学習の時間が恒例となっていた。毎年3学期には、3年生が2年生に大豆についてレクチャーする時間があり、昨年度も3年生から大豆の育て方などを当時2年生だった子供たちは教えてもらっていた。しかし、新型コロナウイルス感染防止のため、休業中に今年度大豆の苗植え等が中止となり、総合的な学習の時間の教育計画を急遽変更することとなった。そこで、蜷川校区に点在する「蜷川の宝」を知るという学習に変更した。

子供たちに「蜷川で生まれ育つこと」に誇りをもってほしい。それが、この学習の目的である。蜷川地域に愛着をもつことは自分のアイデンティティを豊かにすることに繋がる。「蜷川地域はすごいんだ」と誇りをもつために、地域にある「宝」を子供たちの手で宝探しのように見つけてほしい。その「宝」とは地域の大人たちであり、「地域を思う気持ち」である。蜷川には、地域活動に熱心な大人や歴史的に貴重な遺構が多い。しかし、子供たちはそれを知らない。そのため、コロナ禍ではますます地域と子供たちが切り離されてしまうのではないかという危惧があった。地域と子供たちを繋ぐのは学校である。蜷川校区の未来のために、様々な活動に取り組む大人たちを知ることは、蜷川校区への愛着を生み、アイデンティティを形成する基盤となる。地域のために奮闘する大人と交流させることで、子供たちは自ずと地域の宝に気付き、蜷川っ子であることに誇りをもてるようになるはずだと考え、活動を組んだ。

そこで、1学期から3学期にかけて、大きく3期に分けて学習活動を進めることとした。第1期では、地域で様々な活動をしているゲストティーチャーを各クラスに招く「知る」、第2期ではその中からさらに追究したいことを決め深掘りして「まとめる」、第3期は蜷川のすてきを校区・校内等に「知らせる」という流れで学習を進めることで、無理なくのびのびと表現することまでつなぐことができると考える。



2. 活動の実際

(1) 知る

6月から10月にかけて、ゲストティーチャーを招聘し、各クラスで出前講座を行った。自らの活動と、それがどのように地域で生かされているのか、そして、地域や子供たちへの熱いメッセージを送っていただいた。その結果、子供たちはそれまで知らなかった地域のための活動に気付いたり、それを担う大人たちの思いに共感したりすることができた。

来校したゲストティーチャーは、以下の通りである。

にながわふれあい子ども食堂（4名）、保護司（1名）、八坂神社宮司（1名）、蜷川赤十字奉仕団（6名）、蜷川を語る会（太田川の桜の保護について・2名）、富山市埋蔵文化財センター（蜷川の遺跡について解説・2名）、若林農園（1名）、蜷川地域包括支援センター（2名）、赤田獅子舞（10名）、よさこいチーム「蜷川乱舞桜」（5名）、防災士（1名）



にながわふれあい子ども食堂



八坂神社



蜷川を語る会



富山市埋蔵文化財センター



若林農園



防災士



蜷川地域包括支援センター



赤十字奉仕団



よさこいチーム「乱舞桜」



赤田獅子舞



保護司

ゲストティーチャーとの出会いの後、確実に子供たちの目は地域へと向くようになった。月に1度行われる子供食堂に家族で参加するようになった子、太田川沿いの桜の根を守るためのチューリップを植えるボランティア活動に参加した子、それまでは見向きもしなかった地域包括支援センターの車を見かけて手を振ったと報告してくる子、地域で出会う大人たちを「あの人は〇〇をしている人だよ」と保護者へと伝えられるようになった子、防災士から教わった簡易担架を家族全員でやってみた子、蜷川にまだ遺跡はあるはずと公園などで遺跡探しをしている子や埋蔵文化財

センターへ足を運んだ子。自分たちの知らない世界が身近にあったことを素直に驚き、そして、そんな校区であることを嬉しく思っているのが伝わってきた。

(2) まとめる

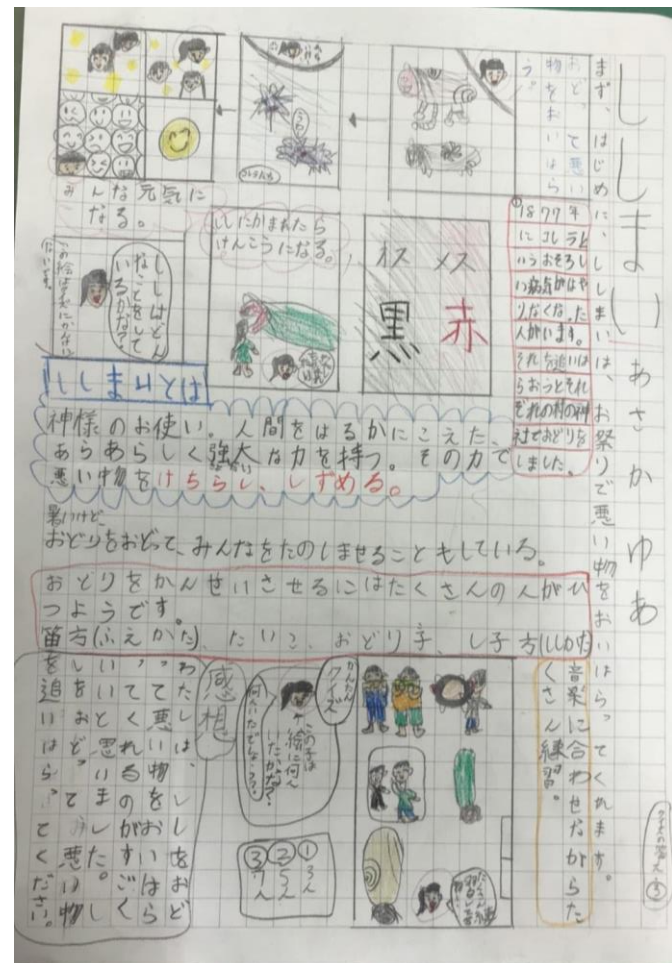
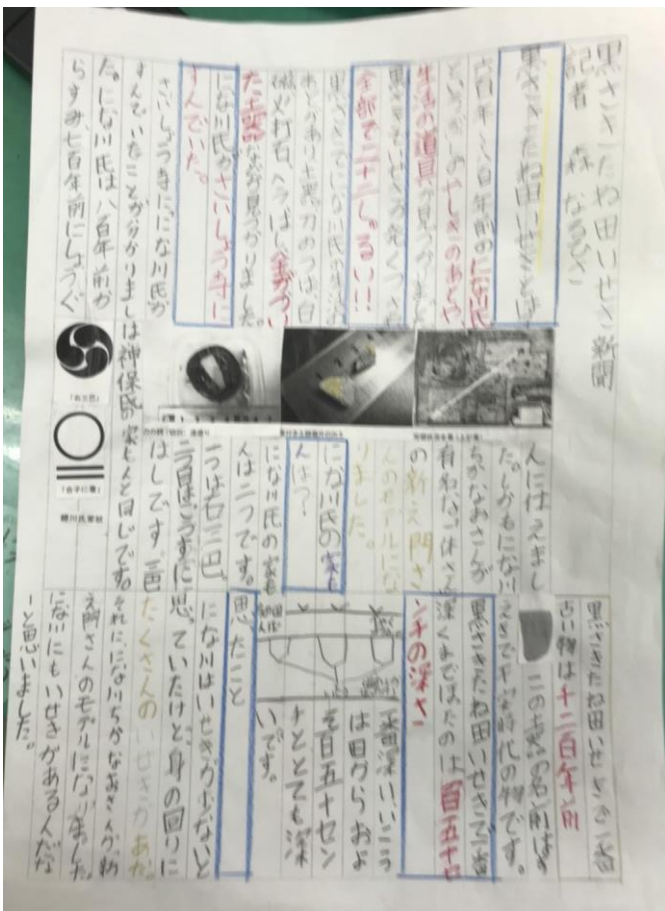
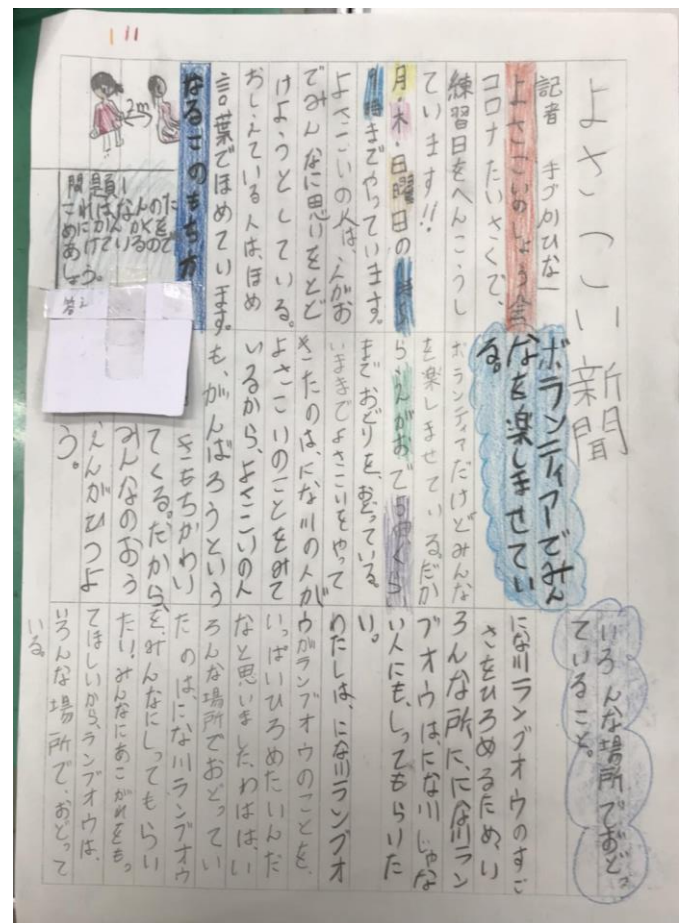
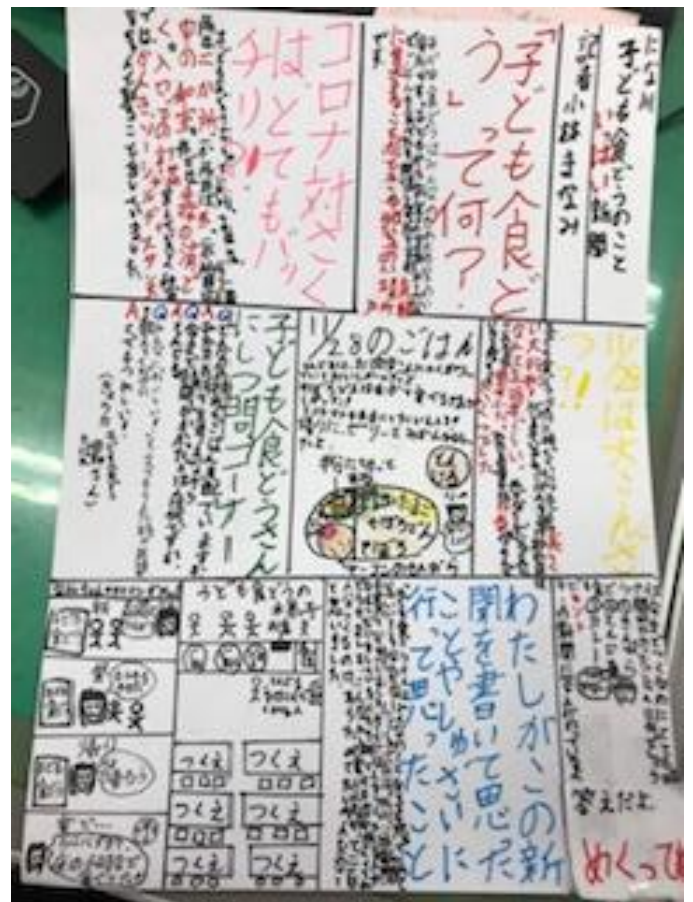
11月から、子供たちはゲストティーチャーから伺った中から、自分でさらに追究したい地域活動等を選び、ゲストティーチャーへのインタビュー（メール）、土日を使った取材、ボランティア活動への参加等、より深く知るための活動を行った。その結果を新聞やポスター等にまとめ、学級内で発表を行った。



クラスでの発表会の様子

自分とは違う活動を追究した児童で3人組になり、インタビューしたことなどをまとめた成果物で発表している。





3. まとめ

子供たちは今、まとめの作業に取り掛かっている。地域に知らせたいと、学校の限定公開 youtube 用に動画を編集する子供、校区に配布されるフリーペーパーに学んだことをまとめたチラシを折り込むための紙面の準備をしている子供。校内の他学年のためにと、校内発表会を開く準備をしている子供、1冊の本にまとめる作業をしている子供など、それぞれの考える方法で「蜷川のすてき」を発信することになっている。

この学習活動には、「にながわふれあい子ども食堂」を皮切りに、個人も含めて11団体が参加した。子供たちはゲストティーチャーが語る思いに耳を傾け、毎回熱心にメモを取り、質問をし、「報告書」にまとめていた。また、獅子舞やよさこいなど、自分たちも体験しながら参加することもあった。毎回質問がたくさんあり、時間の関係ですべての子供たちの質問に答えることができないこともあったが、その子供たちの熱心さに、ゲストティーチャーも励まされ、そして、「蜷川小の3年生がとても熱心に地域を学んでいる」という噂があちこちでたった。

「自分もゲストティーチャーをやりたい」と自薦する団体や保護者も現れたり、「コロナで活動をやめていたが、これは地域の宝だから、なんとかできる形で行いたい」と春に中止された獅子舞の演舞が秋に行われたりと、学校での活動が地域の大人たちを動かしていることも起きている。

コロナ禍で、ややもすれば地域との繋がりが切れてしまう恐れがある昨今であるが、子供たちと地域を繋げる存在として、学校がまず地域と繋がり、学習活動を通して子供たちを地域と繋げることができたのではないかな。こうした、学校・家庭・地域が循環して「地域の誇り」を形成していくことこそ、「宝」となって子供たちの心に刻まれていくことだと考える。

